『アレクサンデル・ダヰドキッチ君は内かね。』
『うむ。臺所にゐるよ。』
ラアエウスキイは、臺所の方へ行つたが、開放しになつてる戸口から覗いて見ると、軍醫は生菜で忙しさうだから、又客間へ戻つて、腰を掛けた。
彼は動物學者の前にゐると、いつも不愉快に感ずる。今は、昨夜のヒステリイに就いて何か言はれやしないかと思つて、心配してをる。
一分間以上が沈默に過ぎた。不意とフオン・コオレンは首を上げて、ラアエウスキイの顏を見て、そして訊ねる——
『その後身體の工合は如何だ。』
『大層好い。』と、ラアエウスキイは赤くなつて答へる。『なアに、元々別に大した事は無かつたんだ……』

『僕はたつた昨日まで、ヒステリイは女に限るものだと思つてゐた、だから初僕は、舞踏病にでも罹つたのかと思つた。』
ラアエウスキイは苦笑をしながら、然う思ふ。『何といふ不作法な奴だ。人が感情を害すのを知つてゐながらあんな事を言ふんだ。』
『然う、全く可笑しかつたね。』と、ラアエウスキイは、また笑ひながら言ふ。
『僕は今朝まで笑ひ通しに笑つてゐた。ヒステリイて妙な事は、自分てそれを可笑しいと思つて、腹の中て笑ひながら、同時に又泣く事だ。吾人の神經過敏時代は吾人を神經の奴隷にした。神經は吾人の主人だ、神經は吾人に向つて勝手な眞似をするんだ。この點に於いて、文明は吾人に向つて實に不思議な任務を果した……』
ラアエウスキイは、フオン・コオレンの眞面目な注意的な態度に氣がつく

と、不快になつて來た。動物學者は何か珍奇な標本でも研究するやうに、凝とラアエウスキイを見詰めてゐた。ラアエウスキイは、フオン・コオレンに對する嫌惡の情に關係なく、如何しても苦笑を留める事が出來ないので困つた。

『實際を言へば、』と。彼は續けて言ふ。『ヒステリイを起したのには直接の原因が隨分あつたんだ、然も重い原因があつたんだ……この頃僕の健康は著しく損はれてをる……この疲勞に加へて、不斷金の不足だ……共通の趣味を持つてる人のゐない事だ……この境遇は知事の境遇よりも惡い……』

『然うだ。君の地位は絶望だ。』と、フオン・コオレンは言ふ。

ラアエウスキイは、この落着いた、冷い、殆ど豫言的な言葉を聞くと、侮辱されたやうに感じた。彼は動物學者の昨日の顏を、あの嘲弄と嫌惡とに滿ちた顏を、思ひ出した。彼は暫く默つてゐた。それから訊いた、今度は笑はず

に。

『如何して君は僕の地位を知つてゐるんだ。』

『たつた今自分で言つたぢやないか。それに君の友達が、君の身の上に非常な興味を持つて、日がな一日、君の事ばかり話してゐるんだ。』

『友達ッて。サモイレンコオの事か。』

『然う、あの人もその一人だ。』

『僕はアレクサンデル君及その他の友達一般に向つて頼みたい、そんなに僕の事で氣を揉んで呉れるなッてね。』

『それ、そこへサモイレンコオが來た。頼んだら好いだらう。』

『どうも僕には君の調子が分らん……』と、ラアエウスキイは口籠つた。彼は不意と動物學者が自分を憎んで居、賤しんで居、嘲つてゐる事が、今初めて確

になつたやうに感じた。彼は動物學者を倶不戴天の敵だと思つた。

『そんな調子は誰か外の人の所へ持つてき給へ。』と、彼は低い聲で言つた。

サモイレンコオは襯衣一枚で這入つて來た、息も窒りさうな臺所の熱で、汗をかいて、眞赤な顏をしながら。

『やあ。』と、彼は言ふ。『好く來た。飯は濟んだか。』

『アレクサンデル君。』と、ラアエウスキイは立上りながら、『縱し僕は私事に關して君を訪ねた事があつても、それは愼重であるべき君の義務や、僕の秘密を守るべき君の責任を、君に逃れさせに來たのぢやなかつた。』

『それは如何いふ意味だ。』と、サモイレンコオは驚いて言ふ。

『若し君に金が無ければ、』と、激して床を蹴りながら、聲を高くしてラアエウスキイは言ひ續ける。『僕に呉れなければ、それて好いぢやないか――斷れば好

いぢやないか。何故、僕の地位は絶望だなどと言ひ觸らして歩くんだ。僕は一錢の事を爲て、一圓の事でも爲たやうに吹聽して歩くやうな、そんな深切や友誼は欲しくない。君は勝手に自分の深切を自慢して歩き給へ、併し僕の秘密を洩して呉れと誰が君に頼んだ。』

『秘密とは何だ。』と、サモイレンコオはくわッとなつて言ふ。『喧嘩をしに來たんなら、歸つて貰はう。そして又後て來て貰はう。』

彼は、「腹が立つたら百數をしろ」といふ古語を思ひ出した。そこで直數をし始めた。

『君は何も僕の事で氣を揉む必要は無いんだ。』と、ラアエウスキイは言ひ續ける。

『僕なんどに決して注意を拂ふ事はないんだ。僕の生活方法に就いて誰が世話

を燒く義務がある。成程、僕はこの土地を去らうとしてをる。成程、僕には借金がある、僕は酒を飲む、僕は人の妻君と一緒にゐる、僕はヒステリイ持だ、僕は賤しい、僕は決して或人達のやうに深い思想家ぢやない、けれども、誰がそれに世話を燒く義務がある。僕の人格を尊重し給へ。』

『まア辛忍し給へ、君……』と、サモイレンコオは恰ど三十五まで數へた所で言ふ。

『だが……』

『僕の人格を尊重し給へ。』と、ラアエウスキイは遮つて、『始終誰かの噂ばかりしてゐるんだ。始終《おお》とか《ああ》とか嘆聲ばかり發してゐるんだ。始終穿鑿ばかりしてゐるんだ、探偵ばかりしてゐるんだ、そんな深切な憐憫は……少しも有難くないんだ。近頃、ある男が僕に金を貸さうとしてをる、併しその男

は、浮浪人にでも持出しさうな條件を、僕に向つて持出してゐるんだ。何の事はない、僕は脅迫されてゐるんだ。僕はもう何も入らない……』

ラアエウスキイは非常に激して、震へながら叫つた、そして又ヒステリイが起りやしないかと心配した。

『もう土曜日には立つまい。』と、同時に彼は然う思つた。

『もう僕は何も入らない。』と、彼は又聲を出して言ふ。『僕は唯君に後見を解いて貰ひたい。僕は子供ぢやないんだ、又狂人でもないんだ、僕はもう君に監督を廢して貰ひたい。』

そこへ助祭が這入つて來た。が、ラアエウスキイが青い顔をして、手を振りながら、ヴォロンゾフ親王の肖像に向つて、妙な聲で何か言つてるのを見ると、釘附にでもされたやうに、戸口の所に突立つて了つた。

『始終僕の心臓に向つて探海燈を照らしてゐるんだ。』と、ラアエウスキイはまだ言ひ續ける。『そして、人間としての僕の威嚴に傷をつけようとしてゐるんだ。僕は熟練な探偵諸君に向つて切に辭職を勸告する。もう澤山だ。』

『何だつて……君は今何を言つた。』と、百まで數へたサモイレンコオは、面に朱を漲いて、屹とラアエウスキイに迫つた。

『もう澤山だ。』と、帽子を手に取りながら、息を跳ませて、ラアエウスキイは又繰返す。

『僕は露西亞の國手だ、貴族だ、州會議員だ。』と、サモイレンコオは靜に言つて、『僕は今までに一度も探偵をした事はなかつた。僕は何人に向つても、決して侮辱の言を許さない。』と、彼は震へ聲で叫つた、殊に最後の一句には力を籠めて、『默り給へ。』

助祭は、今までに一度も未だ、軍醫がこんなに堂々と、顏を眞赤にして、恐ろしく怒つたのを見た事がないので、口に手を當てゝ、笑ひこけながら次の間へ駈けて行つて了つた。

ラアエウスキイは、朦朧たる中にフオン・コオレンの立上るのを見た、それから、兩手を洋窄へ突込んで、如何なるかと立つて見てゐた。

『君の言葉は取消した方が好からう。』と、サモイレンコオは叫つた。

ラアエウスキイは、もう何を自分で言つたか、忘れてゐた。そして、斯う答へた。

『打捨といて呉れ給へ。僕はもう何も入らないんだ。僕は唯君だの、獨逸猶太人だのに、打捨といて貰ひたいんだ。てないと、僕は處置をつけなけりやなら

ん。決闘をしなけりやならん。』

『こりや話が分つて來た。』と、フォン・コオレンは卓の後から出て來て言ふ。『ラアエウスキイ氏は、出發前に決闘をして行きたいと被仰る。僕は氏に向つてその滿足を與へたい。ラアエウスキイ氏、僕は君に挑闘する。』

『僕に挑闘する。』と、ラアエウスキイは動物學者の方へ進んで、その眞黒な額と、擊れた髪の毛とを、さも憎さげに見ながら、低い聲ではつきり言ふ。『挑闘。宜しい。僕は君が憎いんだ、君が憎いんだ。』

『僕に大に喜ばしい。明日、早朝、ケルバライの家の附近、自余の條欵は總て君の自由に任せる。さア、もう歸れ。』

『僕は君が憎いんだ。』と、ラアエウスキイは小い聲で、息苦しさうに言ふ。『僕は長い間君を憎んでゐた。決闘。宜しい。』

『つまみ出して呉れ、アレクサンデル君。てなけりや、僕の方で出て行く。』と、フォン・コオレンは言ふ。『今にも嚙みつきさうだ。』

フォン・コオレンの冷靜な調子は軍醫の心を鎮めた。

彼は俄に我に歸つた。で、兩手でラアエウスキイをしッかり捕へながら、外へ連れ出した、優しい震へ聲で斯う謚きながら——

『友人……深切な好い友人……吾々は少し激し過ぎた……もう澤山だ……澤山だ、友人。』

ラアエウスキイは、この優しい深切な聲を聞くと、何か今までに聞いた事のない驚くべき事が、自分に降りかゝつて來たやうな氣がした。彼は汽車に轢かれたやうな氣がした。彼は獣欲を拙へて、泳ぐやうな手つきをして、そして部屋の外へ駈けて出た。

『ああ情ない。自分の憎んでゐる人間の前で、自分の價値を下げるとは。ああ情ない。』と、彼は泣いた。

それから、カフエへ行つて、腰を卸した。

少量のブランヂイと水とは幾らか彼の精神を爽にした。彼はフオン・コオレンの落着いた高慢な顔を在り在りと思ひ浮べた、それから昨日の顔附を、聲と、白い手を。すると、滿足を求めて飽く事を知らない、燃えるやうな、深い憎惡で胸が一杯になつた。

彼は自分がフオン・コオレンを地面に叩き倒して、それを足で以て踏んづけてゐる所を想像した。彼はたつた今起つた事件を隅から隅まで思ひ出した、そして、如何して自分はあんな價値の無い人間に膝を屈しなけりやならなかつたのかと、自分で自分を驚いた。彼はこの價値の無い町の——その名さへビイタ

アスバアグに住んでゐる立派な人には知れてゐない、この町の平凡な無教育な人間達の意見を、何で少しでも尊重したものかと、それが不思議になつて來た。明日、フオン・コオレンを殺した所で、又活かした所で——それは同じ事だ、何方にしても無用な事だ、面白からぬ事だ。まあ、足か手でも狙つて遣らう——怪我をさして、それから足を一本捥ぎとられた虫のやうに取扱つて遣らう。嘲弄を以て彼を無視して遣らう——彼を彼と同じく價値の無い町民の群衆の内に葬つて遣らう。

ラアエウスキイはシエシコウスキイの所へ行つて、總ての事を話した、そして自分の介添人になつて呉れと頼んだ。その約束を濟ますと、二人は郵便局長の所へ行つて、彼を第二の介添に誘つた、そして此所で食事の馳走になつた。食事をしながら、三人は常談を言つて、笑つた。ラアエウスキイは自分が一向

鐵砲の扱方に經驗のないのを自ら嘲笑つて、態と皮肉に、俺は「キルヘルム・テル」だの、俺は「近衛の綫銃兵」だのと言ふ。

『一つ苛めてやらなきやならん……』と、彼は言つた。

食事が濟むと、皆で骨牌の席に着いた。ラアエウスキイも骨牌をした、酒を飲んだ、決闘に就いて議論をした。彼は斯う考へた、決闘といふものは馬鹿らしいものだ、可笑しなものだ。爭つてる問題を解決せずに、却つてそれを複雜にするものだ。しかも、無しで濟ます事は不可能なものだ。現在の場合はその好い例だ。彼はフオン・コオレンを裁判所へ引張り出した所で、どうも爲方がないんだ。更に又、彼は考へた、この決闘は彼の出發を一層餘義なくするだらう、何故と言へば、決闘の濟んだ後で、いつまでこの町にゐる事も出來なからう。

太陽が沈んで、四邊が暗くなると、ラアエウスキイは不安になつて來た。それは死に對する恐怖ではなかつた——實際、彼は食事をしてる間も、骨牌をしてる時も、決闘をした所で、如何なるものかと思つてゐた——それは未知の或物に對する恐怖であつた、明日の朝起るべき或事に對する恐怖であつた、近づく夜に對する恐怖であつた……彼は、夜の長いだらうといふ事をも、寐られないだらうといふ事をも、自分の心が、フオン・コオレンの事計りでなく、かの嘘の山に就いても考へるだらうといふ事をも、知つてゐた……と不意に、彼は病の波に襲はれるやうな氣がした。骨牌にも、周圍の人にも、總て興味が無くなつて來た、そして、そは〳〵し出して、頻に家へ歸らして呉れと言ひ出した。彼は早く寢床へ横になりたいと思つた、靜に休みたいと思つた、その晩の内に思想を纒めたいと思つた。

シエシコウスキイと郵便局長とは、彼を家へ返して、それから、フオン・コオレンの所へ決闘に就いての相談に行つた。

家の側で、ラアエウスキイはアフミアノフに會つた。この青年は息を跳ませて、そして激してゐた。

『僕は君を探してゐたんだ、イワン・アンドレ キツ チ君。』と、言ふ。『どうか一緒に來て呉れ給へ。直來て呉れ給へ。』

『何處へさ。』

『或紳士が君に會ひたいと言つてるんだ。何か非常に重大な用事があるらしいんだ。一分間でも好いから君に來て貰ひたいといふんで、頻に待つてるんだ。君に是非話したい事があるんださうだ……それはその人に取つて生死の問題なんだ……』

アフミアノフは、激昂の餘、これらの語を強いアルメニア訛で言つた。

『一體そりや誰だい。』と、ラアエウスキイは訊ねる。

『名は言つて呉れるなと頼まれたんだ。』

『僕は忙しいんだと、然う言つて呉れ給へ。先方の都合さへ好ければ、明日……』

『そりや駄目だ。』と、アフミアノフは吃驚して言ひ張る。『非常に重大な話があるんだもの……非常に重大な……』

『妙だ……』アフミアノフの興奮と、その神秘的な樣子とを、理解する事が出來ないで、ラアエウスキイは斯う謎いた。

『妙だ……』と、彼は口籠りつゝ又繰返したが、やがて、『ぢや兎に角行かう。何方にしても同じ事だから。』

アフミアノフは先に立つた、ラアエウスキイは後に隨いて歩いた。二人は横

町へ曲つた。

『中々面倒な道だね。』と、ラアエウスキイは言ふ。

『もう直だ……もうそんなに遠かない。』

城跡に附いて、板圍のしてある明地と明地の間の路地を通つて、大な庭へ這入ると、それから小な家の方へ曲つた。

『こりやムリドフの家だ、然うぢやないか。』と、ラアエウスキイは訊ねる。

『然うさ。』

『ぢや何故裏からなんど來たんだ、分らんな……表から立派に來られるぢやないか。それに道もその方が近い……』

『まア、そんな事は心配し給ふな……』

アフミアノフは何故裏道からなんぞ連れて來たんだらう、そして窃と歩け、

音を立てるな、といふ風に、手を振りなんぞするんだらうと、ラアエウスキイには、それが不思議でならなかなつた。

『此處、此處……』と言ひながら、アフミアノフは窃と戸を開けて、足を爪立てて、玄關へ這入つた。『静に、静に、お願だから……聞えるといけない。』

彼は暫く耳を欹てゝ、一生懸命に息を殺して、そして囁くやうに言つた——

『その扉を開けて、中へ這入り給へ……恐れずに。』

ラアエウスキイは、躊躇しながら扉を開けた、そして、その部屋へ這入つた。天井が低い、窓が窓掛で蔽はれてをる。卓の上にランプがある。

『誰だ。』と、次の部屋から聲がする。『君か、ムリドフか。』

ラアエウスキイは、その部屋をひよいと覗いた、するとキリリンの姿が見えた、それから、キリリンの側に座つてゐるナデエダの姿が見えた……

自分に何を言はれたのだか、それは丸で耳に這入らなかつた。唯彼は器械的に其所を退くと、いつの間にか又往來に立つてゐた……フオン・コオレンに對する憎惡も、それから、不安も、總て逃げて行つて了つた…彼は自分の家へ歩いて歸つた、可笑しな風に右の手を振りながら、そして確り歩かうとするものゝやうに、注意して足元を見ながら……家へ着いて、書齋へ這入ると、手を採み出した、上着と襯衣が緊過ぎでもするやうに、肩を動かし始めた、首を窮屈さうにした。部屋を隅から隅へ歩き始めた。それから蠟燭を點けて、卓の側に座つた……

（十五）

『君の謂ふ人道主義の教理は、人間が實驗科學と一致した時に於いて、初めて人の心を滿足させる事が出來るんだ。この調和は顯微鏡の元に發見されるか、新しいハムレットの獨白の内に見出されるか、或は新宗教の内に現れて來るか、それは僕知らん。僕は唯、然ういふ時代の來る前に、地球は最一度氷河時代を經なければならんだらうと信じてをる。總ての人道主義の教理の内で、最も強固なものは確に基督の教訓だ、併しながら見給へ、この教理が如何に樣々に理解されてをるかを。或者は教へて言ふ、吾人は吾人の隣人を愛さなければならん、但し、軍人と罪人と狂人とは例外だ。第一の者は戰爭へ行けば殺されても爲方がない、第二の者は隔離されるか死刑に處せられなければならん、而して

第三の者に結婚を許す事は出來ん、と斯うだ。然るに又他の註釋者は敎へて言ふ、吾人は例外無しに、即ちプラス、マイナスの差別無しに吾人の隣人を愛さなければならん、と斯うだ。彼等の解釋に依れば、肺病患者でも、殺人犯でも、癲癇持でも、娘を嫁に呉れと申込んで來れば、喜んで遣らなければならんのだ。屈列陳病者が肉體精神共に健全な國民と戰爭を始めても、默つて見てなければならんのだ。この、愛の爲の愛の敎理は、藝術の爲の藝術のそれと同じく、一朝それが盛になれば、終には人類の絶滅を見る事になるだらう。解釋者は無數だ、彼等あるが爲に、眞面目な人間は總ての解釋に滿足せずして、自家獨特の註釋を更に從來のそれらの上に加へようとする。かるが故に、君は或問題を、決して哲學的基礎だとか、或は所謂基督敎的基礎だとかの上に置いてはならん。そは唯君をして問題解決の道を離れしむるまでだ。』

動物學者の言ふ所を注意して聽いてゐた助祭は、暫く考へて、そして斯う言つた——

『總ての人間に共通な道德律といふものは、哲學者が發明したものだらうか、神が作つたものだらうか。』

『そりや知らん。併しながら、それは、吾人の肉體の一組織的部分として認められなければならんやうに考へらるゝ程、總ての國民に理解されてをる。それは決して發明されたのではない。それは唯存在してゐるのだ、そして、いつまでも存在してゐるものだらう。僕はそれを顯微鏡の下に置けとは決して言はん、併しながら、それの組織的結合は、既に實證によつて證明されてをる。即ち、眞面目な頭腦の苦痛と、總ての所謂「心の病」とは、先づ道德律の曲說を以て自己の姿を現す。』

『宜しい。』と、助祭は言ふ。『それは、恰ど胃腑が食物を要求すると同じやうに、道德律が吾人の隣人に對する愛を要求する事を意味してをる。然うぢやないか。併しながら、吾人の天性は利己主義の爲に良心の聲を拒ける、そこて、頭の割れるやうな難しい問題が涌いて來るんだ。若しこれらの問題を哲學的基礎の上に置いてならんとしたなら、如何して吾人は問題の解決に近づく事が出來るんだ。』

『實驗科學に依るのさ。事實の實證に頼るのさ。實際、そりや、然ういふ實證は然う澤山在る譯のものぢやない、が併し、哲學のやうに曖昧なものぢやない、哲學のやうに不定なものぢやない。例へば、道德律は吾人に隣人を愛する事を要求するといふ事實を假定するとする。然らば、如何である。愛といふものゝ職務は、人に少しても害を加へたり、少しても人の安全を脅したりする總ての

者を除去するにあるのだらう。然るに、吾人の學問と實證とは吾人に敎へて、絶えず人類を害し、人類を脅す者は、道德並に肉體の不具者だといつてをる。若し果して然らば、吾人はその不具者に對して宣戰をしなければならんのだ——若し彼等をして具者たらしむるだけの力が吾人に無いとしたならばね。彼等を無害にする唯一の道は、たゞ彼等を滅盡するにある。』

『すると愛は弱者に對する强者の勝利だね。』

『無論さ。』

『けれども主耶蘇基督を十字架にかけたのは强者だつた。』と、助祭は眞赤になつて言ふ。

『そこだ——彼を十字架にかけたのは强者ではない、弱者なんだ。人間の文明は日に增し減退し、生存競爭は日に增し廢されつゝある。從つて、弱者の蕃殖

となる、強者に對する弱者の優勢となる。或初歩の形式の元に、蜜蜂に人間の思想を吹込む事が出來たとして見給へ。その結果は如何なるだらう。必と、殺さる可き筈の雄蜂が生殘つて蜜を喰べ盡し、他の蜜蜂を飢死させて、これを壓服して了ふだらう――その結果は、強者に對する弱者の優勢となり、引いては強者の衰頽となるだらう。恰どこれと同じ事が今人間界に起つてゐるんだ、即ち、弱者が強者を壓服してゐるんだ。まだ文明に接觸しない野蠻人の間では、最も強い者、最も賢い者、最も德の高い者が頭に立つてゐるんだ。然ういふ人が酋長なんだ、然ういふ人が主人なんだ。然るに、吾々文明人は基督を十字架にかけた、そして、今も尙彼を十字架にかけてをる。これは吾人に或物が缺けてをるからだ。そこで、吾人はこの「或物」を復全しなければならんのだ、然らずむば吾人の苦惱は終に止む時があるまい。』

『けれども、君が強者と弱者とを區別する標準は一體何なんだ。』

『學問と實證とさ。肺病患者と癩癧患者とは病氣で分るだらうぢやないか、惡人と狂人とは行爲で判斷がつくだらうぢやないか。』

『併し間違ふ場合もあらう。』

『洪水の來ようといふ時、足の濡れる心配をする必要はない。』

『そ、それが即ち哲學だ。』と、助祭は笑ひ出した。

『いんや、決して然うでない。君は坊主學校哲學の害毒に染みてをるから、在らゆる所に霧を見なければ氣が濟まんのだ。君の頭を一杯にしてをる抽象科學なる者は、實證から君の心を抽象するが故に「抽象」と呼ばれてゐるんだ。惡魔の顏を直視し給へ、そして若しそれが惡魔だつたら、彼は惡魔だと立派に言ひ給へ。決してカントやヘエゲルの所へ、說明を求めに走る必要はない。』

動物學者は一寸默つたが、又直語を續けて――

『二に二を掛ければ四だ、石は石だ。明日は決鬪をするんだ。吾々は今此所に座つて、決鬪は愚劣なものだとか、不合理なものだとか、時代遲れなものだとか、居酒屋で見る醉漢の喧嘩に等しいものだとか、樣々な議論をしてをるが、併し、結局決鬪を止める事は出來ないのだ――明日はどうしても出掛けなければならないのだ、戰はなければならないのだ。して見ると、この宇宙には吾人の理性以上に強い力があるんだ。吾人は常に叫んで、戰爭は追剝だ、野蠻だ、兄弟殺しだと言ふ。吾人は又血を見て氣を喪はずにはをられん。しかも、一旦佛蘭西人なり、獨逸人なりが吾人に侮辱を加へたとすれば、吾人の血は必と即座に湧立つ、吾人は必と「ウウラア」を叫ぶ、さうして吾人は吾人の軍隊の惠まれむ事を必と神に祈る。これ又、宇宙に吾人以上の力なり、吾人の哲學以上の力なり

が存在してをる事を示してをる。吾人は海の上を行く雲を止めることが出來んやうに、この力を止めることは出來ん。僞善は廢にし給へ、腹の中で怒ることなどは止め給へ、『馬鹿らしい。時代遲れだ。聖書に背いてる。』などゝ言ふのは廢し給へ、その力を直視し給へ、その力の正當な事を認め給へ、而して、例へばその力が、癈癈に罹つた、腐敗した、弱い人種を滅しに來るやうな事があるとしたら、誤り解した福音書から辭句を引用して、その妨害をするやうな事は廢し給へ。リエスコフは、小心なダニラが市外で一人の癲病患者に逢つて、それを養ひつゝ、愛と基督の名に依つてそれを悶んでる所を繪にかいた。このダニラが、若し眞に人間を愛する者だつたら、必とその癲病患者を町の外へ引摺り出して、坑の中へ投り込んで了つたらう。僕は思ふ、基督が君人に敎へた愛は理窟に合つた愛だ、知覺のある愛だ、有益な愛だ。』

『君は可笑しな人間だ。』と、助祭は笑ひながら言ふ。『君は基督を信じてゐないんだ。基督を信ずる者が、何て然う矢鱈に彼の名を口にしよう。』

『いいや僕は信じてをる、併し、僕の流儀でだ、君の流儀でではない。おい、助祭君、助祭君。』と、動物學者は笑ひながら言つて、懷しさうに助祭の肩を掴むと、さも嬉しさうに語を續けて、『え、君。君は明日決鬪へ行くんだらう。』

『いや、そりや僕の職務が許さん。』

『君の職務といふと。』

『僕は坊主だ。僕には神の祝福が宿つてをる。』

『おい、助祭君、助祭君。』と、フオン・コオレンは笑ひながら繰返して、『だから僕は君と話すのが好きさ。』

『君は自ら信仰を持つてをると言ふ。』と、助祭は言ふ。『併し、その信仰といふ

のは一体どういふ信仰なんだ。僕の伯父に一人信仰の深い坊さんがある、この伯父は雨乞をしに野へ行く時、歸りに濡れない用心に、必と蝙蝠傘と雨合羽を持つて行く。これが本當の信仰なんだ。彼が基督の話をすると、顏から毫光が差すんだ、百姓や百姓女が悉く感泣するんだ。彼には空行く雲を止める事が出來るんだ、君の謂ふ眼に見えぬ力を無しにして了ふ事も出來るんだ。然り……信仰は山をも動かす。』

助祭は笑ひながら、動物學者の肩を叩いて、『然う――然う。』と、語を續ける。『成程、君は研究をしてをる、海の神秘を探つてをる、弱者と强者との分拆をしてをる、本を書いてをる、決鬪の申込までしてをる――しかも、それが爲に萬物は決してその位置を變へない。然るに見給へ、或弱い老人が、聖靈に充されて、一言口の内で何か言ひてもするか、新しいマホメットが、馬に乘つて、

半月形のサアベルを持つて、アラビアから一寸出て來てもすると――萬物は忽ち根蔕から引繰返つて了ふんだ。全歐羅巴が心髓まで掻き廻されて了ふんだ。』

『成程、そんな事が熊手で空に書いてあつた。』

『勞働の無い信仰は死物だ、併し信仰の無い勞働は更に惡い――それは單に時間の浪費だ、それだけだ。』

恰どその時、ドクトルも堤防へ來た、そして助祭と動物學者が一緒にゐるのを見て、自分もその中へ這入つた。

『もう大抵準備はついた積りだ。』と、彼は息を切つて言ふ。『ゴヴオロウスキイとボイコオが君の介添人になる事になつた。二人とも朝五時には來る筈だ。』と言つて、彼は空を眺め、『馬鹿に暗くなつて來た……雨だな……』

『君も一緒に行くんだらうね。』と、フオン・コオレンが訊ねる。

『いんや、そりや駄目だ。僕は御覽の通り非常に疲れてをる。僕の代りにウスチモキッチが行く筈になつとる。もうあの男に話をして置いた。』

稻妻がピカリと海の上の空の高い所で光つた。鈍い雷の音が木靈に響いた。

『ひどく蒸すね。』と、フオン・コオレンが言ふ。『君は今までラアエウスキイの内で、彼奴の胸に縋つて泣いてゐたんだらう。然うに違ひない。』

『何て僕が彼奴を訪ねる必要があらう。』と、狼狽しながらドクトルは答へた。

挑鬪のあつた後で、サモインレコオは廣小路へ出たのだ、そしてラアエウスキイに會はうと思つて町を歩いたのだ。彼は自分の餘り酷く怒つたのを恥ぢたのである。怒つた後で直又急に親切にしたのを恥ぢたのである。彼はラアエウスキイに會つて、それを詫らうと思つた、常談のやうに言つて詫らうと思つた、序に異見をして、彼の精神を宥めもし、決鬪は野蠻の遺風だからと言つて思ひ

止らせようともしたのだ。實際、明日、これら二人の秀才が銃丸を交換すれば、お互に好い所が分つて、却つて親友になるに相違ないのだ。

併し、ドクトルは終にラアエウスキイに會はなかつたのである。

『何で僕が彼奴を訪ねる必要があらう。』と、サモイレンコオは繰返す。『僕が奴を侮辱したんぢやない、奴が僕を侮辱したんだ。一体、何だつてあんなに食つて掛つたもんだらう。僕は奴に對して何か惡い事をしたかしら。客間へ這入るか這入らないに、行きなりと人を捕へて「探偵」呼ばはりをするぢやないか。君は知つてるんだらう。一体初は如何したんだ。君は奴に何を言つたんだ。』

『貴樣の地位は絶望だと言つたのさ。然うに違ひないもの。一体困難な境遇から脱け出るには、正直にやるか、惡者になるか、この二つの内一つを取るより外に道は無いんだ。然るに奴は兩方一度に遣らうとしたんだ、困るのは當り前さ。併し、兩君、もう十一時だ、明日は早く起きなければならん。』

『荒れ氣味だね。』と、助祭は言ふ。『もう行かう。』

二人と一緒に歩きながら、サモイレンコオはほッと太息を吐いた、そして帽子を手にした儘で、『今夜は迚も寢られまい。』と言ふ。

『心配する事はないさ。』と、動物學者は笑ひながら言ふ。『安心して居給へ、決闘をした所で決して如何なるんでもないんだから。寛大なラアエウスキイは必ず空を打つだらう——外に打ち樣を知らんのだからね——僕は全然打たん積りさ。ラアエウスキイの爲に裁判所へ引張り出されて、時間を浪費するのは——實に愚だもの。時に、決闘をするとどんな罰を食ふんだ。』

『拘留さ。相手が死んだ場合には、城塞に三年禁錮される。』

『ペトロパウロスクてか。』

『いんや、多分軍隊の獄舍へ入れられるんだと思つた。』
『ふむ――それは先生にとつて一番好い教訓になるだらう。』
又稻妻が海の上の空で光つた、家の屋根や、山の峯が、一瞬間ぱッと明るくなつた。三人は廣小路の近くて別れた。
ドクトルの姿が暗闇へ隱れて、もう足音も聞えなくなつた時分に、フオン・コオレンはその方を向いて叫つた。
『明日は天氣が惡さうだね。』
『然うさねえ。でも、爲方がないさ。』
『ぢや、お休み。』
『何。すみだッて。何だか分らない。』
風の音と海の音と雷の音とに隔てられて、人の語は聞えなかつた。

『何でもないんさ。』と、動物學者は叫つた、そして家へ急いだ。

(十六)

....En mon esprit, en proie au chagrin,
Se pressent en foule les lourdes pensées :
Le souvenir silencieusement devant moi
Déroule son long ruban ;
Et avec dégoût je revois ma vie,
Je tremble et je maudis,
Et je me plains amèrement, et je verse des larmes ;
Mais elles n'effacent pas les tristes lignes.

—*Pouchkine.*

Pouchkine

『明日俺は殺されるかしら、それとも助かるかしら——併し、孰にしても、もう没落だ。然う言へば、あの不貞な女の運命も同然だ——自殺をするか、哀な生存を續けるか、この二者の中孰かを選まなければなるまい——どつちにしても、もう滅亡だ....』

ラアエウスキイは、その晩遅く、卓の側に座つて、まだ手を揉みながら、こんな事を考へた。

と、不意に窓がバタリと開いて、酷い風が吹込んで來た。そして床の上の書類を散らした。

彼は立上つて、窓を閉めた、そして書類を拾はうとして身を屈めた。と、彼は今までにない妙な感覺を經驗した、今までに覺の無い可笑しな運動を始めた、彼は兩方の肱を横ッ腹へぴッたりと喰附けて、悒々しながら歩いた、そして卓

の側に座ると、又手を揉み出した。彼の身體は丸で柔軟性を失つて了つたのだ。

彼は偶と血腐へ手紙を出さなければならなかつた事に氣がついた。そこでペンを取つて、ぶる〳〵と慄へた字で『親愛なる母上よ。』と書いた。

彼は母に向つて、彼女の信ずる善良なる神の御名に依つて、彼の辱しめた、哀な、寂しい、不幸な、弱い婦人を、深切に世話してやつて呉れと書いた。この犧牲に依つて、息子の恐しい罪惡を幾分たりとも償つて呉れと書いた。然う書いて、彼は母の姿を思ひ浮べた。どッしりと肥つた老婦人が、レエスの帽子を冠つて、狆狗を連れて、朝、母屋から庭へ出て來る、そして號令をかけるやうな大な聲で、植木屋に何か命令をする。その横柄な高慢な顏を思ひ出すと厭になつて——ラアエウスキイは折角書いた文句に十文字を引いて了つた。

と、稻妻が窓を通して光つた、續いて、長い、聾になりさうな雷の音が聞え

て來た、初はゴロ〳〵と鈍く、やがてガラ〳〵と烈しく。ラアエウスキイは立上つて、窓の所まで歩いて行つて、そして窓硝子にぴッたりと額を押つけた。外には壯麗な嵐が荒れてゐる。地平線では稻妻が白い鍵の手をして、雲から海へ閃いてゐる、高い黑い浪を折々ぱッと照らして。

『嵐だ。』と、ラアエウスキイは囁いた。と、彼は無性に祈りたくなつた——嵐に向つて、或は雲に向つて。『ああ惠深き嵐よ。』

彼は子供の時の事を思ひ出した。嘗て彼は嵐の最中に帽子も冠らず庭へ飛出した事がある、二人の、青い眼をした、ブロンドの女の子が、彼の後から追かけて出て來た。彼等は喜んで笑つた、そして、一度ひどい雷が鳴つた時、女の子は二人ともぴッたりと彼に身を寄せた。彼は十字を切つて、『聖なる、聖なる、聖なる……』と口の内で念じた。

ああ、その清い美しい生の始まりは今何處へ行つて了つたらう、何處の海に溺れて了つたらう。彼にはもう嵐も恐しくない、自然に對する愛も無い。神も存在してをらぬ。彼が今までに知つてゐた總ての信實な女の子は、彼の爲に、或は彼の同輩の爲に、みんな滅されて了つた。彼は自分の庭に一本の樹さへも植ゑなかつた、草の葉一枚をも育てなかつた。彼は唯滅したのだ、毀したのだ——そして嘘を吐いたのだ、嘘を吐いたのだ……

『俺の過去の生涯で、惡くなかつた事は何だらう。』と、彼は自ら訊ねて見た、恰ど絶壁から落ち掛つた人が、木の蔓を捕へようとするやうに、何か明るい追憶を捕へようとして。

大學では如何だつたらう。いんや——それは虚僞の生活だつた。彼は哀な學生だつた、いつても教はつた事はみんな忘れて了つた。

役所へ出てからは如何だつたらう。いんや——それも同じ事たつた。彼は役所へ出ても、何一つ爲なかつた、何も爲ないで月給を貰つてゐた、彼の勤め方は裁判所に起訴する事の出來ない官金私消の一種に外ならなかつた。

彼は眞理を感じた事は一度もなかつた、又眞理を求めた事も一度もなかつた。彼の良心は不德と虚僞とに惑はされて、常に眠つてゐるか、默してゐるかしたのである。外國人のやうに、外の星の世界から來た人のやうに、彼は普通の人間の生活には一向無關係であつた。普通の人間の、苦痛だの、思想だの、宗教だの、學問だの、勞作だのに對しては、一向無頓着であつた。彼は彼等に向つて一言でも善い事を言はなかつた、一行でも役に立つ事を書かなかつた、一文の價値ある爲事をさへ爲なかつた。彼は唯彼等の麭麵を喰べた、彼等の葡萄酒を飲んだ、彼等の妻君を連れて逃げた、彼等の思想で生活した、そして、自己

の哀な食客的な生活を、彼等の眼にも自分の眼にも明るく見せる爲に、絶えず自分は彼等より立優つた人間だといふ風をした。

虚僞、虚僞、常に虚僞……

偶とムリドフの家で見た事が、はッきりと細く思ひ出された。この思出は悲痛と不快とで彼の胸を一杯にした。キリリンとアフミアノフとは如何にも賤むべき奴等だ、併し、彼等は彼の始めた事を承次いで遣つたに過ぎないのだ——彼等は彼の同類なのだ、弟子なのだ。彼を兄以上に信じた一人の弱い若い女から、彼は亭主を奪つて了つたのだ。彼は女を友達と家から誘ひ出して、熱病と疲勞とを得させに、こんな所へ連れて來たのだ。日毎に女は、男の怠惰と不德と虚僞とを心の鏡に映してゐるのだ。男は女を捨てはしないのだ、併し嘘で女を包まうとしてゐるのだ——嘘で——嘘で……

ラアエウスキイは卓から立つた、窓の方へ歩いて行つた、又座つた、又立つた。一度蠟燭を消した、それから又點けた。彼は聲を出して自分を呪つた、絶叫した、號泣した、そして、宥を乞うた。幾度も彼は机の所へ駈けて行つて、『親愛なる母上よ。』と書いた。

母の外に彼の頼るべき血屬は世界に一人も無いのだ。併しながら、彼の母は如何して彼を救ふ事が出來よう。彼女は一体何處にゐるのだらう。

彼はナデエダの所へ駈けて行つて、その足元に跪いて、宥を乞はうとした、併し、彼女は彼の生贄であつた、彼は死骸から飛退くやうに彼女の側を飛退いた。

『俺のライフはもう去つて了つたんだ。』と、彼は手を揉みながら、口の内で言ふ。『ああ。それだのに何故俺はまだ生きてゐるんだらう……』

彼は空から我が運命の星を引いた。その星は沈んだ、そして、夜の暗闇に隠れて了つた。又出る事は終にあるまい、人生は一度より與へられないものだから。彼にして若し過去の月日を呼返す事が出來るなら、彼は虚偽に代ふるに眞實を以てするだらう、怠惰に代ふるに勞作を以てするだらう、悲痛に代ふるに歡喜を以てするだらう。盜んだ貞淑は返すだらう。再び神と正義とを認めるだらう。併しながら、總てこれは、今落ちた星を再び空に戻すより困難な事だ。

嵐の止んだ時、彼は開いた窓の側に座つて、靜に己の身に起るべき事を考へた。フオン・コオレンは必ず彼を殺すだらう。

あの男の、明快な、冷靜な天性は、弱い者、不用な者を滅亡するより外の事を考へてゐないのだ。とは言へ、若し彼が狙を外したら如何しよう、或は、自分のやうな賤むべき相手方に對して、侮蔑の意を表するが爲に、唯傷をつけるか、空を打つかしたら如何しよう。然うしたら自分は何所へ行かう。

『ビイタアスバアグへ行かうか。』と、ラアエウスキイは我と我に訊ねた。併し、それでは、折角今自分の呪つてをる昔の生活を、又遣り直す事になる。場所の變更に救を求めて、失敗らない人は今までに一人も無かつた。世界は何所へ行つても同じ事なのだ。然らば、人間に救を求めようか。いんや、それも駄目である。サモイレンコオの深切と大量とは、助祭の滑稽や、フオン・コオレンの憎惡程にも、人を救ふ力を持つてゐなかつた。救はこれを自己に求めなければならぬ、求めて自己に見出す事が出來なければ、死ぬより外ない——自殺するより外爲方が無い……

馬車の近づく音が聞えて來た。夜が明けかゝつて來た。馬車は窓の前をゴロ〳〵と通つて、角を曲つた。車輪が濕つた砂を嚙んで、キシ〳〵と鳴つた。ラ

アエウスキイの家の前で留つたのである。馬車の中には男が二人乘つてゐた。
『待つて呉れ給へ、今直に行くから。』とラアエウスキイは窓の中で言ふ。『僕は寢ちやゐないんだ。併し、もう時間か。』
『然うさ、もう四時だ……』
ラアエウスキイは外套を着た、制帽を冠つた、卷煙草を少し衣兜へ入れた、そして躊躇して佇んだ。まだ何か爲る事があるやうな氣がしたのである。往來では、二人の介添人が何か低い調子で話してゐた、馬が鼻を鳴らしてゐた。まだ人が皆寢てゐる、恰ど夜の明けかゝつた、この早い濕つた朝に、これらの音を聞いて、ラアエウスキイは神氣沮喪した。彼は何か惡い事に遭ひさうな氣がしたのである。彼は暫く立つてゐたが、やがて寢室へ這入つた。
ナデエダは、自分の寢床に、格子縞のショオルを被つて、長々と寢てゐた。

少しも動かずに寢てゐた。丸で埃及の木乃伊のやうだつた。ラアエウスキイは悲しげにその側に立つて、心で女に宥を乞うた、そして、若し天といふものが空虛でなく、實際神といふものがそこにゐるものなら、必と女を守護して呉れるだらうと思つた。併し、若し神が無いものなら、彼女は死んでも爲方がないと思つた。彼女に生きなければならんといふ理由は一つも無いのだから。
不意に女は眼を開いた、そして起直つた。女は青い顏を上げて、恐ろしげにラアエウスキイの顏を見ながら、斯う訊ねた——
『まあ、貴方でしたの。もう嵐は止みまして。』
『ああ止んだ。』
女は偶と先刻の事を思ひ出して、兩手で顏を蓋うた、そして身體中で慄へた。
『ああ苦しかつた。』と、女は呻くやうに言ふ。『私がどんなに苦しんだか貴方は

知らないでせう。私待つてゐましたのよ。』と、女は半分眼を閉いで語を續ける。
『私は貴方に殺されるか、あの雨風の中へ追出されるだらうと思ひました。けれど、貴方は躊躇なさいましたのね……貴方は躊躇なさいましたのね……』
男は矢庭に女を抱いて、その腕に接吻した、そして女が何か口の内で言つて、ぶる〳〵と慄へた時に、女の髪の毛を撫で〳〵やつて、直と女の顔を見詰めた。
この不幸な、不貞な女も、彼にとつては、慰換の無い、唯一人の近しい親しい人間だといふ事が、今彼に分つた……
家を出て、馬車に乗ると、一縷の希望が湧いて來た。彼は生きて又家へ歸りたいと思つた。

（十七）

助祭は起きると、着物を着て、太い杖を手にして、靜に家を出た。
外は暗かつた。空には一つも星が無くて、どうやら又雨が降つて來さうだつた。濕つた砂の匂と海の匂とが大氣に充ち滿ちてゐた。
『成程、大分本式に荒れたんだな。』敷石道に太い杖の當る音を聞いた時に、助祭はこんな事を考へた。
町の外れへ來ると、行手が仄り見えた。と、黑い空が切れて、星が一つ恐々顏を出した、唯一つの眼で瞬きしながら。
助祭は、海の見えない、高い、岩の多い、海岸の道を歩いた。足元には海が眠つてゐた、そして眼に見えない浪が、低く呻きながら、勞れたやうに、怠け

て岸を打つてゐた。浪は少しも見えなかつた。海の眠さうな濁つた音が耳へ這入ると、彼は無限の大空を支配する神を思ひ出した。

彼は恐怖の念に襲はれた。彼は不信者と交はつたり、決闘の手傳に行つたりした爲に、神の刑罰に會ふだらうと思つた。勿論、今日の決闘は失敗に終るだらう、一滴も血は流されまい、餘程面白い觀物に違ひない。併し、その遣り方が如何であらうとも、結局それが異端的の觀物たるに變りはない、坊主の見るべき物でないに變りはない。彼は立留つて、歸らうかと思つた。併し、猛烈な、躁暴な好奇心は、彼を壓服した。彼は又てく〳〵と歩き出した。

『成程、あの人達は不信者だ。併し、みんな好人物だ。いつか救はれる時がある。』と、彼は自分で自分を慰めた。『必といつか救はれる時がある。』と、彼は聲を出して言つた。

そして卷煙草を吸ひ始めた。

人を正當に裁判するには、如何いふ標準で刑罰を定めたら好からう。助祭は、昔自分の敵だつた、坊主學校の監督を思ひ出した。この人は神を信じてゐた、決闘をした事などはなかつた、純潔な生活をしてゐた。しかも彼は、一度助祭を罰して、砂をつけた麪包を喰べさせた。もう一度の時は、千切れさうになるまで耳を引張つた。政府の麪包粉を盗んで生きてをる斯樣な慘酷な惡監督が、總ての者に尊敬されて、その健康と安泰とを人に祈られる程、人生といふものが馬鹿〳〵しく出來てゐるものなら、フォン・コオレンやラアエウスキイの如き人達を、唯信者でないからと言つて、避けるやうな事をするのは果して正當な行だらうか。

助祭はこの問題を色々に思ひ廻らした、併し、サモイレンコオの可笑しな恰

好を思ひ出すと、思想の流が方向を轉じた。『今日はまアどんなに可笑しいだらう。』助祭は、自分が藪の蔭に身を潜めて、凝と見物してる樣子を思ひ浮べた。そして、晝飯の時、クオン・コオレンが自慢話を始めたら、反對に決闘の有樣を此方から詳しく話して遣らう。

『どうして君は其樣に詳しく知つてるんだ。』必と斯う動物學者は訊くだらう。

『そこが術だ。』と、此方が答へる。『僕は家にゐて、ちやんと知つてるんだ。』

それから、決闘の有樣を、滑稽な文章で、手紙に書いたら嘸面白からう。自分の養父はそれを讀んで、必と笑ふだらう。養父は滑稽な事が大好きだ。

黄河の谷が見えて來た。その小な川は雨の爲に水容を增して、最早小な聲で呟いてはゐなかつた、大な聲で吠えてゐた。仄々と夜が明け始めた。鈍い灰色の朝、西の空へ千切れて飛ぶ雲、霧に鎖された山々、雫の垂れる樹々——總ての景色が、助祭に、醜悪な、腹の立つやうな感じを與へた。彼は川の水で顔を洗つた、そして朝の祈禱を誦した。彼は養父の家の食卓で毎朝の例にしてゐたやうに、クリイムをつけた暖い捻麺麭で茶が飲みたくなつた。彼は妻君の事を思ひ出した。彼女は一体どんな女だつたらう。助祭は一週間の内に、紹介もされ、婚約もし、結婚もして了つたのだ。彼はまだ妻君と一月も起居を共にしない内に、この土地へ派遣されて了つたのだ。妻君を知る機會は、本當にまだ幾らも無かつたのだ。しかも妻君が側にゐなければ、やッぱり寂しいのだ。

『然うだ、あれの所へ手紙を出さなければならん……』と、彼は考へた。

旗亭の旗が、雨に濡れて、ぐたりと頂垂れてゐた。まだ屋根の濡れて光つてゐる旗亭は、いつもより暗く、低く見えた。幌の掛つた一臺の荷馬車が門口につけてあつた。ケルバライと二人のアビシニア人と一人の韃靼人の女とが、上股

引を穿いて、頻に袋を運んで來ては、それを荷馬車に積んでゐた。その直側に驢馬が二疋、首を垂れて佇んでゐた。嚢を積み終ると、アビシニア人と韃靼人の女とは蓆をその上に被せ始めた、その間にケルバライは急がはしく驢馬を車につけるのである。

『抜け賣だな、必と。』と、助祭は考へた。根を出して倒れてゐる、刺の枯れた樹があつた。焚火の焦げた名殘があつた。彼は野遊會の晩の出來事を一々思ひ出した——焚火、アビシニア人の歌、自分の見た行列と高僧との樂しい夢……

小な黒河も、雨の爲に、いつもより黒くなつてゐた、いつもより幅が廣くなつてゐた。助祭は、氣をつけて、危い小な橋を渡つた、橋は濁つた水に殆ど洗はれさうになつてゐた。それから、梯子を登つて、乾小屋の中へ這入つた。

『中々利口な奴さ。』彼は蓆の上へ延び〳〵と横になると、フォン・コオレンに

就いてこんな事を考へる。『中々利口な奴さ。いつまでも健全なれだ。併し、慘酷な男だ……』

何故彼はラアエウスキイを憎むのだらう。又何故ラアウエスキイは彼を憎むのだらう。一体彼等は何の爲に決闘をするのだらう。若し彼等にして、彼助祭が子供の内に經て來たやうな悲慘事を知つてゐるなら。若し彼等にして、彼が育てられて來たやうな、性質の荒い、無智な、殘忍な、私慾的な社會で育てられて來たなら。若し彼等にして、境遇と友人とに傷はれて來なかつたなら。如何に喜んで、彼等はお互の缺點を許し合つたらう、そして、お互の性質の好い所を認め合つたらう。この世界に、善良な人は然う澤山ある譯のものではない。成程、ラアエウスキイは怠け者だ、道樂者だ、併しまだ盜賊をした事はあるまい、音を立てゝ地面に唾をした事はあるまい、妻君に向つて、『働かないと、手

を折るぞ』といふやうな亂暴を言つた事はあるまい、馬でも打つやうに、子供をビシ〳〵打つた事はあるまい。それだけで、もう十分ぢやないか。彼は自分の傷で苦しむ負傷者のやうに、自分の過失で苦んだ第一人者では無かつたらうか。お互の性格を分析して、お互に墮落呼ばはりをしたり、遺傳性だの何だのと陸に分りもせぬ事を議論したりする事の代りに、お互に少しでも讓歩を爲合つて、怒らずと深切に考へた方が、遙に賢ではあるまいか。遙に善ではあるまいか。無智と私慾と慘酷と憎惡とならば、もう世界に十分あるではないか……

馬車の近づく音が、助祭の默想を破つた。彼が戸の外を覗くと、男の三人乘つてる馬車が見えた——ラアエウスキイとシエシコウスキイと郵便局長とだ。

『留めた。』と、シエシコウスキイが言ふ。

三人は馬車から降りた、そしてお互の顏を見合つた。

『まだ遣つて來ないんだな。』と、シエシコウスキイは服の泥を拂ひながら言ふ。

『先づ適當な場所を見つけなければならん。此所は少し狹い。』

三人は川に附いて歩き出した、そして直に見えなくなつた。韃靼人の馭者は馬車の内に腰を掛けた儘、首を肩の方へ曲げて、ぐう〳〵眠つてゐた。

十分許りすると、助祭は乾小屋から出て來た。黑い帽子を脱いで、身を屈めて、四邊を見廻した。それから、藪を分け分け、進んで行つた。

直と人の聲がして來た、そして人の姿が見えて來た。

ラアエウスキイは、首を垂れて、兩手を衣兜へ突込んで、小な原を早足で往つたり來たりしてゐた。介添人は川の側に立つて、卷煙草を卷いてゐた。

『妙だな。』と、助祭は思ふ。彼にはラアエウスキイの姿が歴然認められなかつたのである。『老人のやうだ。』

『失敬な人達だ。』と、郵便局長は懷中時計を見ながら言つた。
『敎育のある人達にとつては、遲刻して來るのが好い事なのかも知れんが、僕等にとつては不禮な事だ。』
黑い髯の生へてゐる、大男の、シエシコウスキイは、暫く聽き耳を立てゐたが、やがて言つた——
『遣つて來た。』

『實に綺麗だ。』フオン・コオレンは原ッぱへ出て來ると、斯う言つた、そして兩手を東の方へ突出した。『見給へ、あの綠の光線を。』
東の空では、山の後から、日が登りかけてゐた。
『お早う。』と、動物學者はラアエウスキイの介添人に顆で會釋をしながら、語を續ける。『遲かつたか、然うか。』
彼の後から、介添人が隨いて來た——二人の青年士官、ボイコオとゴヴオロウスキイとである、二人とも白リンネルの上着を着てゐる——それから、痩せた、無口な、醫者のウスチモキッチが隨いて來た。彼は片手に小な包を持つてゐる。最一方の手では、常の癖で、背中に斜かひに、杖を擔いてゐる。彼は誰にも挨拶をしないで、包を地邊の上に置いた、そして原ッぱを散歩し始めた。
ラアエウスキイは疲勞と困累とを感じた。彼は早く殺すか家へ返すかして貰

ひたいと思つた。

彼は生れて初めて日の出を見た。早い朝、赫々たる太陽の線の光線、濕つた空氣、周圍にをる人々、總てが彼の生涯にとつて不必要に見えた——總てが彼を苦しめた。今、彼の感情は、昨夜から今朝へかけて彼の經て來た所のものとは、何等の關係も無いものであつた、又、罪に關する彼の思想や感覺とも何等の連絡が無いものであつた。若し今決闘をせずに歸れるものなら、彼は喜んで決闘をせずに歸つたらう。

フオン・コオレンが興奮してゐるのは事實だつた。彼はそれを隱さうとして、珍しい太陽の光線の方が、決闘の準備よりも多くの興味を彼に與へたやうな風を裝つたが、それは無駄だつた。介添人は當惑した。彼等は、何の爲にこんな所へ來たのか、これから何が始まるのかと、それを訊ねるものゝやうに、お互

の顏を見合つた。

『諸君、もう少しもこれから先へ行く必要はあるまいと僕は思ふ。』と、シエシコウスキイは言ふ。『此所で十分だ。』

『勿論、然うだ。』と、フオン・コオレンは同意した。

一瞬間、人語が絶える。

往つたり來たりしてゐたウスチモキツチは、突然ラアエウスキイの方を振向くと、彼の顏に息を吹掛けながら、緩い調子で斯う言つた——

『君はまだ僕の出て來た條件を聞かんだらう。兩方で僕に十五ルウブル宛拂ふんだ、若し片つ方が死ねば、殘つた方が一人で三十ルウブル拂ふんだ。』

ラアエウスキイは前からこの男を知つてゐた、併し、その爛れた眼や、硬い髭や、痩せた、肺病やみのやうな咽喉に氣がついたのは、今が初めてである——

どうしても高利貸だ、迚も醫者ぢやない。その息は、不快な、牛肉のやうな匂がする。

『世間には變つた人間もゐるものだ。』と、ラアエウスキイは思つた、そして大な聲で答へた。『承知してをる。』

醫者は頭を振つた、そして又散歩を始めた。

みんな、もう始める時分だと思つた、或は、既に始まつてゐる事をお終にする時分だと思つた、併し、誰もそれを發議する者は無かつた——みんな、唯歩いたり、突立つたり、煙草を呑んだり計りしてゐた。二人の青年士官は、踊るつもりで舞踏會にでも來た人のやうに、リンネルの上着を丁寧に撿閲したり、手で袖を熨したりなどしてゐた。

と、シエシコウスキイが二人の所へ來た、そして低い聲で言つた——

『兩君、どうかしてこの決闘は止めさせなさやいかん。和解させなさやならん。』

彼は顔を赤くして、語を續けた——

『君等の方のキリリンが自分で僕の家へ訴へに來た所に依ると、昨夜先生ナデエダ・フエドロウナに逢つてる所をラアエウスキイに見つけられたといふぢやないか。それに……』

『然う、その話は僕等も聞いた……』と、ボイコオが言ふ。

『まア見給へ……ラアエウスキイの手はあんなに慄へてゐる。あれぢやア迚もピストルは持てまい。あの男と決闘するのは、酔漢と決闘するのより無情だ。どうしても和解が出來ないとあれば、兩君、どうかして決闘を延期させようぢやないか、如何だね……こんな恥辱な事は、僕見るのも厭だ……』

『フオン・コオレン君に相談して見たら好いだらう。』

『果してそれが適當な方法だらうか。』と、シエシコウスキイは迷つて、士官の上着の釦を一つ摑みながら訊ねる。『え。』

『何故然うでない。』

『僕は決闘の規則は知らん――そんな物は如何でも好い――知らうとも思はん。併し彼は必と、ラアエウスキイが恐ろしくなつて、僕を使に寄越したんだと思ふだらう。けれども、まアどうなと彼の隨意に任す事にしよう、兎に角話して見よう。』

シエシコウスキイは、見えぬ程に跛を引きながら、まだ決斷のつかぬ樣子で、フオン・コオレンの方を向いた。そして、その方へ歩きながら、咽喉をぐッぐッと言はせた。

『君、僕は君に少し話があるんだ。』と、彼は動物學者の着てゐるシャツの摸樣

を注意して見ながら、口を開く。『これは秘密だがね……僕は決闘の規則を知らん――そんな物は如何でも好い――知らうとも思はん。僕は今介添人として君に話をするのぢやない、唯一箇の人間として話をするのだ……』

『宜しい。それで。』

『たとひ介添人が和解させようとしても、その勸告は用ひられないで、大抵の場合決闘は行はれて了ふものだ。それはプライドの問題だ。だが、僕は頭を下げて頼む、まあラアエウスキイの體裁を見て遣つて呉れ給へ。今日は奴調子が狂つてるんだ、殆ど氣が違ひさうになつてるんだ、哀れな態だ。あの男は或不幸に遭遇したんだ……僕は饒舌はしたくない、』――シエシコウスキイは赤くなつて、四邊を見廻した――『が、これは決闘の前に、一應君にも話しとく必要があると思ふ。昨夜あの男は、自分の妻君がキリリンと一緒にムリドフの家にね

る所を見つけたんだ……』

『拙らん。』と、動物學者は呟いた。彼は青くなつた、顏を蹙めた、そして音をさせて唾をした。『ぷうッ。』

彼の下唇は慄へた。もうその事に就いては何事をも聞くまいとするやうに、シエシコウスキイの側を離れた。彼は何か厭な味のする物を口に入れたやうな氣がして、又音をさせて唾をした。それから憎々しげにラアエウスキイの顏を見た——まだ一度もラアエウスキイの顏を見なかつたのだ。興奮が靜まると、彼は頭を振りながら、大な聲で叫つた——

『諸君、何を君達は待つてゐるのだ。何故始めんのだ。』

シエシコウスキイは二人の士官と眼を見交して、肩を縮めた。

『兩君。』と、彼は誰に向つて言ふでもなしに、大な聲で、『兩君。僕等は切に兩

君の和解を望む。』

『總ての形式を盡したのだ。和解の話も最う濟んだのだ。次いで來るべきものは何か。』

『それでも尙僕等は和解を主張する。』とシエシコウスキイは苦しさうな聲で言つた。又彼は赤くなつて、胸に手を置いた、そして語を續けた——

『兩君、僕等は決鬪の依つて起るべき何等の正當な理由を認めない。人間が弱い爲に人に對して與へる侮辱と決鬪との間には何等の連絡も無い。君等は大學を出た人だ、敎育のある人間だ、決鬪が恥辱を雪ぐ手段として時代遲れなものである位の事が分つてをらんといふ法はあるまい。僕等でさへ然う思つてるんだ、でなければ、誰がこんな所まで遣つて來るもんか。僕等は僕等の面前でピストルを放ち合ふ事を許す事が出來んのだ——それ丈の話だ。』

シエシコウスキイは、額の汗を拭いた、そして語を續けた——

『兩君、どうかお互に誤解を解いて呉れ給へ、握手をし合つて呉れ給へ、僕等は兩君の友愛の爲に盃を擧げたい。兩君、是非とも然うさせて呉れ給へ。』

フオン・コオレンは默つてゐた。ラアエウスキイは、皆が自分の方を向いてゐるのに氣がついて、斯う言つた——

『僕はニコライ・ヴシリエヰッチ・フオン・コオレン君に對して何も惡意は持つてゐない。僕が惡いといふのなら、喜んで僕は詫る。』

フオン・コオレンは輕蔑されたやうな氣がした。

『諸君。』と、彼は言ふ。『諸君はラアエウスキイ氏を豪俠な武士のやうにして引取らせようといふんだね。お氣の毒だが、それは許せんね。仲好く酒を飲んだり物を食つたりする爲や、決闘は時代遲れな形式だといふやうなお話を承る

爲なら、態々朝早く起きて、町から十里も離れた所へ出かけて來る心要は無かつたんだ。決闘は決闘だ、それを實價以上に愚劣にしたり、實價以上に虚僞にしたりする必要は少しも無い。僕は何處までも決闘を要求する。』

又語が絶えた。

士官のボイコオは、持つて來た箱からピストルを二挺取出した。そして一挺を動物學者に、他の一挺をラアエウスキイに渡した。

やがて決闘の遣り方に就いて、色々と議論が起つて來た。結局、ここに來てゐる者の中に決闘を實見した者は一人も無いといふ事が分つて來た、從つて、決闘をする二人の者を何處に立たせたら好いのか、それから先は如何したら好いのか、誰も知つてゐる者は無かつた。

ボイコオは言つた、先づ廿歩の間隔をとらなければならん、間隔をとつたら、

Lermontof.

その兩端にサアベルを突立てる、それから「進め。」といふ號令で、決闘をする二人が兩方から相對して歩き出す、そして互に十歩の距離に來た所で、ピストルを放ち合ふのが式だと。併し、この説明は誰にも一向解せなかつたらしかつた。

『諸君、諸君の中で誰かレルモントフの決闘の描寫を覺えてる者はないか。』と、笑ひながら、フオン・コオレンは訊ねる。『ツルゲヂエフにもバザロフの決闘する所があつたね……』

『そんな物を覺えてゐる必要が何處にある。』と、ウスチモキッチは腹立たしげに立留つて言ふ。『十歩間隔をとり給へ——然うすりやそれで好いんだ。』

ボイコオは十歩を數へた、連のゴヴオロウスキイはその兩端にサアベルを突立てた。

決闘する二人は、四邊を支配する沈默の内に、各その位置に就いた。

『鼠だ。』と、藪の隱に蔭れてゐる助祭は思つた。

『挑闘をしたのはフオン・コオレン君だ。』と、シエシコウスキイは言ふ。『よつて第一發は君に權利がある。』と、ラアエウスキイに向つて言つた。『然うだらう、然うぢやないか。』

『その通り。』と、ボイコオが言ふ。

ラアエウスキイは撃鐵を上げた、そして、冷い重いピストルを上げて、銃口を上の方に向けた。彼は上着の釦を外す事を忘れた、それが爲に肩だの腕の下だのが、何だか窮屈に思はれた。彼は不器用に手を上げた。彼は相手の黒い額や撃れた髪の毛に對して、昨日感じたやうな憎悪の念を呼び起した、併し彼は、あの時でも、あんなに激してゐた時でも、この男に向つてピストルを放つ事だ

けは出來なかつたと思つた。

萬が一にも、銃丸がフオン・コオレンを倒すやうな事があつてはならぬと、彼はピストルを一層高く上げた。その時彼は、こんなにしては、餘り自分の大量を見せつけるやうになりはせぬかと思つたが、どうも外に爲樣は無かつた。

ラアエウスキイは、初から相手方の空に打つのを知つてゐるらしいフオン・コオレンの、青白い、嘲るやうな顏を見て、『有難い、何にせよ、もう直終になる。』と思つた。そしてもう引金を一寸押せば好い計りになつた……

ピストルが切つて放された時、彼の肩は激しく後へ引けた。と、木靈が山から答へた。『ヅ――ヅウウン。』

今度はフオン・コオレンが撃鐵を上げた、そして、相變らず手を後へ遣つて、何事が起らうと一向構はずに往つたり來たりしてゐるウスチモヰツチの方を振

向いた。

『ドクトル。』と、動物學者は言ふ。『どうか然う振子のやうに彼方へ行つたり此方へ來たりしないで呉れ給へ。眼移りがして爲樣がありやしない。』

醫者は立留つた。フオン・コオレンはピストルを上げた、そして、ラアエウスキイを狙つた。

『もう駄目だ。』と思ふと、ラアエウスキイはわな〳〵慄へ出した、身内が寒くなつて來た。跳び退きたいやうな氣がした、倒れたいやうな氣がした、死にたいやうな氣がした。彼がその瞬間に覺えた感覺は、それ程恐ろしく、それ程新しいものだつた。

彼の顏に眞面に向けられたピストルの銃口、フオン・コオレンの姿勢や顏形に見える憎惡と侮蔑の表情、白晝理性ある人々の前で理性ある人に依つて行はる

、殺傷、この沈默、而してラアエウスキイを逃げもならずに立つてゐさせることの神秘な力――總てが不可解である、總てが異常である、總てが恐ろしい。

フオン・コオレンの狙つてゐる間が、ラアエウスキイには一晩よりも長く思はれた。彼は哀訴する者の如く、介添人の顏を竊み見た。彼等は少しも動かずにゐた、靑くなつてゐた。殺氣と死息が四邊を籠めてゐるやうに見えた。

『早く打てば好い。』と、ラアエウスキイは心の內で思つた、そして自分の、靑白い、慄へてゐる、哀な顏色は、尙とフオン・コオレンの憎惡を增すだらうと思つた。

『今直殺して遣るぞ。』と、相手の額を狙ひ澄まして、引金に指をかけながら、フオン・コオレンは思ふ。『うむ、必と殺して遣るから…』

『あ、殺す。』と、不意に大な聲が藪の中から聞えた…

同時にピストルの音がした……

ラアエウスキイが倒れもせずに、その立つてゐる所に立つてゐるのを見た時、皆は一齊に、その大な聲の起つた方角を見た、すると、助祭がゐた。彼は眞靑な顏をして、濡れた髮の毛を額や頰へたに附着けて、絞るやうに濡れて、泥だらけになつて、畠の向うに立つて、妙に笑ひながら、濡れた帽子を振つてゐた。

シエシコウスキイは喜んで笑ひ出した、それから、泣き出した。

（十九）

暫してフオン・コオレンと助祭とは橋の上で會つた。助祭は興奮して、息を跳ませてゐた。彼は、自分の驚いた顔と、濡れた泥だらけの着物とを恥ぢて、フオン・コオレンの眼を避けた。

『僕は必と殺すだらうと思つた。』と、彼は口の中で言つた。

『だが、どうして君は此所へ來たんだ。』と、動物學者は訊ねる。

『それは訊いて呉れ給ふな。』と、助祭は手を振つて、『悪魔が誘惑したのさ……行け、行けッてね……そこて僕は出かけて來たんだ、そして畠の中で見てゐたんだ、實に驚いたよ、僕は死ぬかと思つた……併し、まア有難い、有難い……僕は非常に滿足だ：　伯父貴の「タランチユラ」も嘲喜ふだらう……嬉しい、大

に、嬉しい。併し、僕の此所へ來た事だけは、どうぞ誰にも言はずに置いて呉れ給へ、でないと、上役が又喧しいからね。必と」助祭は介添人の一人だつた。」位の事は言ひ出すに違ひないんだ。』

『諸君。』と、フオン・コオレンは皆を見廻して、『助祭君に此所て會つた事は、どうか誰にも言はずに置いて呉れ給へ、それは助祭君から諸君にお願ひするさうだ、若し諸君が話されると、助祭君は非常に迷惑するさうだ。』

『實に人間の天性に反した事だ。』と、助祭は溜息をするやうに言つた。『失敬よ、併し、君の顔附は確にあの男を殺しさうに見えた。』

『實際、僕はどうかしてあの悪漢を殺して遣りたいと思つたんだ。』と、フオン・コオレンは言ふ。『けれども、恰ど僕が打たうとした時に君が叫つたんて、狙が外れて了つたんだ。君が彼奴の命を助けたんだ。僕は總て今日の始末を不快に

思ふ。僕は非常に疲れた、助祭君。僕は非常に心細くなつて來た。さア……一緒に馬車に乘つて歸らう……』

『いや、僕は歩かして呉れ給へ。こんなに濡れてゝ寒いから、乾かしながら歸りたい。』

『ぢやア自由にし給へ……』と、動物學者は一人で馬車に乘ると、眼を閉つて、倦さうな聲で言ふ。『自由に……』

助祭を除いて、外の者は皆馬車へ乘込んだ。

ケルバライは、往來傍へ出て來て、兩手を腹に當てゝ、齒を出しながら、例の低い御辭儀をした。彼は旦那衆が朝の空氣を吸ひながら、茶でも飲みに來たのだらうと思つた、だのに、どうして又馬車へ乘るのだらうと、それが分らなかつた。

默り切つて一行は出發した。助祭は唯一人旅亭の前に殘つた。

『さ、内へ這入つて、茶を拵へて呉れ。』と、彼はケルバライに向つて言ふ。『それに何か喰べたい。バンケエクを作つて呉れ、それからチイスを呉れ。』

『さア、さア、坊樣どうぞお這入り下さりませ。』と、ケルバライは御辭儀をしながら言ふ。『何でも差上げまする……チイスもございまする……葡萄酒もございまする……何でもお好みの物を召上りませ……』

『韃靼語では「神」の事を何と言ふね。』と助祭は旅亭へ這入りながら訊ねた。

『旦那衆の神樣も私等の神樣も――神樣に變はございませぬ。』と、ケルバライは助祭の問が好く分らないで言ふ。『神樣は世界中に唯御一人でございまする。違ふのは唯人間計りでございまする。人間には露西亞人もございまする、土耳古人もございまする、英吉利人もございまする、まだ色々の人種がございます

る――だが神樣は御一人でござりまする。』

『そりや本當だ。だが、果して總ての國民が一人の神を信じてゐるものなら、何故君達回々教徒は吾々基督教徒を倶不戴天の敵かなんぞのやうに思ふんだ。』

『何をお怒りなさりまする。』と、ケルバライは、兩手で腹を摑みながら言ふ。

『貴方樣は耶蘇の坊樣で入らつしやりまする、私は回々教の信徒でござりまするその貴方樣が、「何か喰べたい。」と被仰れば、私は何でも差上げるのでござりまする……どれが御前の神樣で、どれが俺の神樣だなどゝ御議論をなさるは金持衆ばかりでござりまする。私等貧乏人にとりましては、みんな同じでござりまする。さ、どうぞ、召上つて下さりませ。』

この神學上の議論が行はれてゐる間に、ラアエウスキイは家路を急いだ。彼は、その朝馬車で決鬪をしに來た時感じた恐怖を、今又思ひ出した――その時、

道だの、岩だの、山だのは、濡れてゐた、暗かつた。測り知れぬ未來は恐ろしい底無し谷の如く、彼の前に朦朧見えてゐた。然るに今は、草の葉や、岩の上の雨の雫が、ダイアモンドのやうに日光に輝いてをる、自然が嬉しさうに微笑してをる、恐ろしい未來はもう後へ去つて了つた。

ラアエウスキイは、時々シエシコウスキイの、悲しさうな、涙に汚れた顏を見た、それから前の馬車を見た。前の二臺の馬車には、フオン・コオレンとその介添人と醫者とが乘つてゐた。ラアエウスキイには、總て彼等が、多くの人を苦しめた或許し難い惡人の埋葬を了つて、寺から歸つて來る人達のやうに見えた。

『總てが終つた。』と、彼は自分の過去に就いて考へた、靜に首を指で叩きながら。襟の側の首の右側に一寸した膨れが出來てゐた。それが、誰かに首へ熱い燒鏝でも押付けられた後のやうに痛んだ。銃丸が皮膚を掠つたのであつた……

家へ歸ると、その日は長かつた、奇妙だつた、樂しかつた、そして夢のやうに朦朧してゐた。監獄から出て來た人か、病院から出て來た人のやうに、自分の長く見慣れてゐた物を珍しさうに見た、そして、椅子だの、窓だの、卓だの、日光だの、海だのが、彼が長の年月の間に一度も經驗した事のないやうな、明るい、子供らしい歡喜を呼起す種になつたのを驚いた。

やつれた、青い顔をしたナデエダ・フエドロウナは、男の優しい聲だの、奇妙な態度だのを、解する事が出來なかつた。女は急いで總ての事を男に話した……

併し、男は聞かないやうな振をして、聞いてゐた、彼は唯女の顔や髪の毛を撫でた、女の眼の内を覗いた、そして、優しい聲で斯う言つた——

『御前は俺の妻だ。御前より外に俺に妻は無い。』

それから二人は互に身を擦り寄せて、長い間塀の側に列んで腰掛けてゐた。二人は大抵默つてゐた、そして再び未來の幸福を夢見てゐた、二人は折々出し抜に、短い語を交すのみであつた、二人には、この晩程長く、この晩程仲好く話をした事はまだ一度も無かつたやうに思はれた。

（二十）

それから三月經つた。

愈〻フオン・コオレンの出發と定めた日が來た。その日は朝早くから、重い冷い雨が降つた。北東の風が吹いた。海が荒れた。この天氣では迚も汽船は碇船所へ這入れまいと思はれた。時間表によると、汽船は朝の十時に着く筈だつた、併し、フオン・コオレンは、お午と午後と、二度も堤防まで出かけて見たが、いつも灰色の浪と雨との外には何も見えなかつた。

夕暮近く、雨は止んだ、そして、風も凪いだ。フオン・コオレンは、今日はもう立つまいと決心して、サモイレンコオと象棋を指し始めた。黄昏時になると、從卒が這入つて來た。燈が遠くの海に見えると言ふ、狼烟も空に見えたと

言ふ。

フオン・コオレンは俄に慌て出した。サモイレンコオに接吻する、助祭に接吻する、在らゆる部屋を驅け廻る、料理番や從卒に別を告げる、それから袋を肩に擔いで往來へ飛出したが、まだ何か忘れ物があるやうな氣がした。

往來へ出ると、彼はサモイレンコオと列んで歩いた。二人の後から助祭は箱を一つ持つて、從卒はトランクを二つ持つて隨いて來た。

遠くの海に朦朧した燈を見る事が出來たのは、サモイレンコオと從卒とだけだつた、後の二人は頻に暗闇を見込んだが、何も眼に這入らなかつた。汽船は海岸から餘程離れた所に碇を卸してゐた。

『早く、早く。』と、フオン・コオレンは皆を急き立てる。『僕を載せずに出て了ふと大變だ。』

決闘が濟んで直ラアエウスキイが引移つた三つ窓の小な家の前を通りかゝると、フオン・コオレンは覺えず中を覗き込んだ。ラアエウスキイは、窓の方へ背中を向けて座つて、卓に押被さるやうにしながら、何か頻に書き物をしてをる。

『驚いた。』と、動物學者は低い聲で言ふ。

『うむ、驚いたらう。』と、サモイレンコオは吐息をつく。『朝から晩まで彼あやつて座つてるんだ。座つた儘で爲事をしてるんだ。借金をみんな片附けようとしてるのさ。この頃は乞食より酷い生活をしてるんだ。』

半分間、語が絶えた。動物學者と、醫者と助祭とは、ラアエウスキイの後姿を見ながら、窓の側に暫し佇んだ。

『とう〳〵出發しなかつたんだ、可哀さうに。』と、サモイレンコオは言ふ。『あの男がどんなに苦しんだか君は覺えてゐるか。』

『ゐるとも。』と、フオン・コオレンは答へる。『先づ結婚さ、それから麵包の爲の日々の勞働さ、あの男の顏にも歩きつきにも現れて來た新しい表情さ。僕は總てこれをどう解釋して好いか、それは知らん。併し、兎に角變つた。』

動物學者はサモイレンコオの袖を捕へて、情に動かされた聲で語を續けた——

『どうか、あの男の妻君にも、僕が二人に對して深い尊敬を拂つてゐる由を傳へて呉れ給へ。僕は出發の際……總ての幸福を二人の爲に祈つて行つた……と、どうか二人に傳へて呉れ給へ。出來る事なら僕を惡く思つて呉れるなと、どうかあの男に頼んで呉れ給へ。あの男は好く僕を知つてをる、若し僕にあの男の今度の變化を先見するの明があつたなら、僕はあの男の最も親しい友達であつたに相違ないといふ事も、あの男は好く知つてをる。』

『いッそ寄つて、告別をして行つたら好いだらう。』

『いや、それは好くない……』
『何故いかんのだ。もう何時又會へるか分らんぜ。』
動物學者は暫く思に沈んで、佇んでゐたが、やがて眼でも覺めたやうに――
『そりやア本當だ。』
サモイレンコオは靜に窓を叩いた。
ラアエウスキイは驚いて飛び上ると、四邊を見廻した。
『ワンヤ。ニコライ・ワシリエヰッチ君が君に告別をしたいさうだ。』と、サモイレンコオは言ふ。『これから出發する所なんだ。』
ラアエウスキイは卓を離れて、扉を開けに玄關まで出て來た。サモイレンコオと、フオン・コオレンと、助祭とは中へ這入つた。
『ほんの一寸の間だよ。』と、動物學者は玄關でオオヴアシユウズを取りながら

言つた。彼はもう自分が感情に負けて、呼ばれもしない人の家へ這入つて來たのを後悔してゐるのである。『丸で押込だ。』と、彼は思ふ。『馬鹿らしい。』
『邪魔をして濟まん。』と、皆が部屋へ這入ると、彼は大な聲で言ふ。『けれども、もう直行くんだ。一寸君に告別がしたくなつたんで寄つたんだ。又何處で會へるか分らんからねえ。』
『それは嬉しい……僕は謹んで君の爲に祈る……』と、ラアエウスキイは言つて、不器用な手つきで椅子を客に勸めた。
それから部屋の眞中に立つて、手を揉み出した……
『こんな證據人達は往來に待たしとくんだつた。』と、フオン・コオレンは思つたが、併し確りした聲で斯う言つた――
『決して僕を惡く思はないで呉れ給へ、イワン・アンドレヰッチ君。そりや過

去を忘れる事は不可能だらう――過去は餘りに悲慘だつたからね――併し、僕は此所へ詫りに來たのぢやない、僕に罪は無いなどゝ言ひに來たのぢやない。僕は自分の思ふ通りを率直に遣つて來たんだ、あの時以後と雖、僕の信ずる所に決して變りは無いんだ……そりや僕が君を誤解してゐたのは事實だ。併し、人間といふものは平坦な道の上でも得て躓くものだ――それが人間の運命なんだ――縱し全躰に於いては誤つてゐなくとも、箇々の問題に於いては誤る事があるものだからね。誰も絶對の眞理を知つてゐる者は無いさ。』

『然うだ、誰も眞理を知つてゐる者は無い……』と、ラアエウスキイは言つた。

『ぢやア、然やうなら……隨分御機嫌好う。』

フオン・コオレンはラアエウスキイに手を呉れた。ラアエウスキイはそれを振つて、腰を曲げて御辭儀をした。

『どうか惡く思はないで呉れ給へ。』と、フオン・コオレンは言ふ。『どうか妻君にも宜しく言つて呉れ給へ、直接お目にかゝつて御挨拶をする事が出來ないで、非常に殘念がつてゐたと傳へて呉れ給へ。』

『妻は恰度内にをるよ。』

ラアエウスキイは、扉の所まで歩いて行つて――

『ナデエダ。ニコライ・ワシリエヰッチ君が御前にお別れをしに來られたぞ。』

ナデエダ・フエドロウナが出て來た。彼女は敷居の所に立留つて、恐る恐る客の顔を見た。

彼女の顔は罪に責めらるゝやうに見えた、悔えてゐるやうに見えた。彼女はその手を叱られた學校の子供のやうにしてゐた。

『ナデエダ・フエドロウナさん、僕はこれから出發します。』と、フオン・コオレン

は言ふ。『それで貴方にもお別に上つた譯です。』

彼女は恂々しながらフオン・コオレンに手を呉れた、と、ラアエウスキイは又腰を屈めて御辭儀をした。

『二人とも實に哀れな態だ。』と、フオン・コオレンは思ふ。『二人は少からぬ物を費して、斯かる生活を買つたんだ。』

それから、聲を大くして——

『僕はモスコオへもビイタアスバアグへも行きますが、何か送つて欲しい物はありませんか。』

吃驚して、ナデエダは夫と眼を見交した。

『別に何もございませんやうですが……』

『然う、何も無い……』と、ラアエウスキイは手を揉みながら言ふ。『僕の友人總て宜しく言つて呉れ給へ。』

フオン・コオレンは、もうこの上何を言つたら好いのか分らなかつた。その癖内へ這入る前には、何か深切な、溫い、勵をつけるやうな事を言つて遣らうと思つてゐたのだ。彼はもう何も言はずにラアエウスキイの手を振つた、それからナデエダの手を振つた。そして何か壓迫されるやうな心持で其所を出た。

『何といふ人達だ。』と、助祭は後に隨いて歩きながら、小な聲で言ふ。『ああ。何といふ人達だ。神の正しき御手はこの葡萄園にもやはり種を蒔かれたのであつた。有難い、有難い。一人は千人に勝つた、他の一人は千人の十倍にも勝つた。ニコライ・ワシリエキッチ君。』と、彼は熱して言ふ。『君は今日人間の敵の内の最も大なる者に勝つたんだ——ブライドに勝つたんだ。それを君は知つてるか。』

『止め給へ、助祭君。僕等は果して勝利者だらうか。勝利者なら恐のやうに見えなければならんね。然るに、あの男はあんな哀れな態をしてをる、あんなに悄々してをる、丸で支那の人形かなんぞのやうに、腰を低くして御辭儀ばかりしてをる。それに僕は……僕は厭に悲しい。』

足音が後に聞えた。ラアエウスキイが急いで見送りに遣つて來たのだ。

港には從卒がトランクを二つ持つて立つてゐた、その少し向うに船頭が四人ゐた。

『うう、ひどい風だ。ぶるるるッ。』と、サモイレンコオは言ふ。『この分ぢや海は餘程荒れてるぜ……うう。うう。今出かけるのは廢さないか、コルヤ。』

『僕は船には酔はんよ。』

『それを言ふのぢやない……奴等は途中で君を引繰ら返さんとも限らんぜ。然

うだ。事務官の船に乘つくてが好い。』

『事務官の船は何處にあるんか。』と、彼は船頭達の方へ向つて叫つた。

『もう出かけて了ひました、閣下。』

『それぢやァ稅關のは。』

『やッぱり出て了ひました。』

『ぢやァ何故早く報告せんのか。』と、サモイレンコオは怒つて言ふ。『馬鹿な奴等だ。』

『同じ事た、まァ怒り給ふな。』と、フオン・コオレンは言ふ。『では、然やうなら。御機嫌好う。』

サモイレンコオはフオン・コオレンを抱いた、そして彼の上に三度十字を切つた。

『コルヤ。忘れちやいかんよ……手紙を……來年の春は又待つてるぞ。』
『然やうなら、助祭君。』と、フオン・コオレンは助祭の手を振りながら言ふ。
『君の樂しい同宿と、お蔭で色々有益な話をする事が出來たのとを有難く感謝する。エクスペヂションの事は好く考へて置き給へ。』
『ああ好いとも。僕は世界の果までも行くよ。』と、助祭は笑ひながら答へる。
『僕は一度だつてそれに反對した事があるかい。』
フオン・コオレンはラアエウスキイが暗闇にゐるのを認めて、默つて最一度手を呉れた。
船頭は既に乘込んで、とゐすれば杭に打つかる端艇を押へてゐた。
フオン・コオレンは梯子を降りて、船に乘込んだ、そして、艙の方に座つた。
『手紙を呉れ給へよ。』と、サモイレンコオは叫る。『丈夫でゐて呉れ給へよ。』

『誰も絶對の眞理を知つてゐる者は無い。』と、上着の襟を立てゝ、兩手を袖に突込みながち、ラアエウスキイは考へる。
端艇は杭の廻りを二三遍ぐるぐるッと廻つて、それから廣い海へ乘出した。
直と浪に隱れた、かと思ふと、直又その深い谷から高い山へすうッと上つて來て、船の中の人から櫂までが好く見えた。
『手紙を呉れ給へよ。』と、サモイレンコオは又叫る。『何といふ天氣に出かけたものだらうなア。』
『然うだ、誰も絶對の眞理を知つてゐる者は無い……』と、悲しさうに、荒れてゐる暗い海を見ながら、ラアエウスキイは考へる。
『端艇は後へ押される。』と、彼は思ふ。『二歩前へ進むかと思ふと、一歩後へ下る。併し、船頭は強い、彼等は撓まずに漕ぐ、そして大浪を恐れない。端艇は

段々に進んで行く。もう見えなくなつた。もう三十分もすれば船頭に汽船の燈が見えて來るだらう。一時間もすればもう汽船の横に着いてゐるだらう。人生も恰ど同じ事だ。人が眞理を求めて、二歩前へ進むかと思ふと、直又一歩後へ下る。生活の苦痛や失敗や疲勞は人を後へ押し返す、けれども、眞理に對する渇望と、意志の頑固な力とは、又前へ前へと人を押す……何處まで行くのか、それは分らない。恐らく、斯くして終に絶對の眞理に到達するのだらう……』

『然やうならアーアーア。』と、サモイレンコオは叫つた。

『もう見えはせん、聞えもせん。』と、助祭は言ふ。『航海の無事を祈るばかりだ。』

……雨が又ぽつぽつ降つて來た……

《終》

明治四十三年四月廿五日印刷
明治四十三年四月廿八日發行
不許複製
決定價金壹圓

譯者　小山内薫

發行者　東京市京橋區中橋廣小路六番地　前川又三郎

發行者　大阪市東區北渡邊町八十九番地　杉本要

發賣所　東京市京橋區中橋廣小路振替東京四一〇九番　前川文榮閣
大阪市東區北渡邊町振替東京二八二三番　杉本書店

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　佐久間衡治

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區中橋廣小路六番地　梁江堂書房

梁江堂書類

綱島梁川君 宇佐美英太郎君	見神論評	全	金七十錢 郵税八錢
綱島梁川君	回光錄	全	金壹圓二十錢 郵税十二錢
同君	病間錄	全	金壹圓二十錢 郵税十錢
中村春雨君	新約物語	全	金壹圓 郵税十錢
同君	舊約物語	全	金壹圓五十錢 郵税十二錢
同君	基督物語（備解）	全	金十錢 郵税二錢
トルストイ原著 内田魯庵君	イワンの馬鹿	全	金二十錢 郵税四錢

梁江堂書類

梁江堂書類

清澤滿之君 **懺悔錄** 全 郵金七十錢 稅八十錢

浩々洞同人 **沈思錄** 全 郵金六十錢 稅八十錢

山路愛山君 **社會主義管見** 全 郵金三十錢 稅六十錢

梁江堂 **病間錄批評集** 全 郵金二十五錢 稅六十錢

蟹川龍夫君 **眞言哲學** 全 郵金六十錢 稅八十錢

小野藤太君 **起信哲學** 全 郵金六十錢 稅八十錢

同君 **佛教年代考** 全 郵金六十錢 稅八十錢

梁江堂書類

梁江堂書類

伊藤銀月君 **草鞋日記** 五十三次 全 郵金五十錢 稅六十錢

同君 **草鞋日記** 豆相名勝 全 郵金五十錢 稅六十錢

同君 **草鞋日記** 山陽道中 全 郵金五十錢 稅六十錢

澁川玄耳君 **東京見物** 全 郵金五十錢 稅六十錢

中澤弘吉君 **富士十二景** 水彩畫 全六枚 郵金二十錢 稅十二錢

小林萬吾君 **風景水彩畫帖** 全六枚 郵金四十錢 稅八十錢

岩野泡鳴君 **泡鳴詩集** 全 郵金五十錢 稅八十錢

梁江堂書類

梁江堂書類

文學博士 建部遯吾君 **靜觀餘錄** 全 金壹圓二十錢 郵稅十二錢

高木壬太郎君 **基督教安心論** 全 金七十錢 郵稅八錢

第一高等學校教授 東洋大學 三浦藤作君 ホルデンベルク **佛陀傳** 近刊

早稻田大學教授 早稻田大學體育部長 阿部磯雄君 **體育談** 近刊

同君 **理想の人** 金七十錢 郵稅八錢

同君 **理想の人 第二篇** 近刊

同君 **理想の女** 近刊

梁江堂書類

舟橋水哉君 **倶舍哲學** 全 金六十錢 郵稅八錢

伊藤銀月君 **男女觀** 全 金十五錢 郵稅四錢

現代名士 **戀愛觀** 全 金三十錢 郵稅四錢

伊藤銀月君 **新男女觀** 全 近刊

京都帝國大學講師 文學士 瀧精一君 **藝術講話** 近刊 金壹圓 郵稅十錢

文學士 上田敏君 **文藝講話** 全 金壹圓二錢 郵稅十錢

浩々歌客 **鷗心錄** 全 金六十錢 郵稅六錢

梁江堂書類

梁江堂書類

薄田泣菫君 落葉 全 金八十五錢 税郵八錢

薄田泣菫君 薄田泣菫二君 名家書翰集 全 金六十五錢 税郵八錢

沼田亘葉女史 露國チエホフ傑作集 全 金九十錢 税郵八錢

露國チエホフ著 小山内薄君譯 決鬪 近刊

柳島梁川君 寸光錄 全 金一圓二十錢 税郵八錢

同君 書簡集 上卷 金一圓十錢 税郵八錢

同君 歐洲倫理思想史 近刊

梁江堂書類

吉永智海君 支那佛教史 全 金六十錢 税郵八錢

山路愛山君 支那思想史 全 金四十五錢 税郵八錢

同君 日本思想史 近刊

早稻田大學教師 五十嵐力君 兒童の研究 全 金壹圓十錢 税郵

堺枯川君 婦人問題 全 金四十錢 税郵六錢

伊藤銀月君 現代青年論 全 金三十錢 税郵六錢

海老名彈正君 靈海新潮 全 金八十錢 税郵八錢

梁江堂書類

梁江堂書類

米下尙江君 懺悔 全 郵税共 金三十五錢

同君 小説 靈か肉か 全二冊 各郵税共 金四十錢

同君 小説 良人の自白 全四冊 郵税共 金一圓六十錢

同君 小説 火の柱 全 郵税共 金三十五錢

大倉桃郎君 小説 琵琶歌 前篇 郵税共 金六十錢

同君 小説 琵琶歌 後篇 近刊

同君 小説 舊山河 全 郵税共 金六十錢

梁江堂書類

磨瑠璃園著 小説 乳人政岡 全三冊 郵税共 各金七十五錢

古愚莽主人著 家庭小説 ゆるさぬ關 全 郵税共 金壹圓十二錢

尾崎紅葉山人 小説 戀の山賤 全 郵税共 金五十錢

澁柿園雨君 福地櫻痴君 コンタリニー物語 全二冊 近刊

福地櫻痴君 小説 葵の御紋 近刊

同君 小説 御落胤 近刊

同君 小説 水野閣老 近刊

梁江堂書類

梁江堂書類

中村春雨君	小説	無花果	全 郵税金七十錢
同君	小説	密航婦	全 郵税金七十錢
小山内八千代女史	小説	新緑	全二冊 郵税各金六十錢
水谷不倒君	小説	岩窟王	全 郵税金四十五錢
柳川春葉君	小説	縁の糸	全 郵税金六十錢
殿谷小波君	喜劇	七草	全 郵税金八十錢
朝倉無聲君	日本小説年表		全 郵税金壹圓八錢

梁江堂書類

梁江堂書類

福地櫻痴君	小説	唖の涙	近刊
小栗風葉君	飜釋小説	サアフオー	近刊
内田魯庵君	飜案小説	イカモノ	近刊
同君	小説	二人畫工	近刊
菊池幽芳君	小説	月魄	全二冊 郵税各金九十錢
同君	小説	妙な男	合本 郵税金一圓二十錢
小笠原白也君	小説	嫁が淵	全二冊 郵税各金六十五錢

梁江堂書類

梁江堂書類

大倉桃郎君 小說 不知火 全 郵金六十五錢 稅八錢

石川半山君 小說 世界的大競爭 全二冊 郵各金六十錢 稅各八錢

須藤南翠君 小說 間一髮 全 郵金七十五錢 稅八錢

德田秋聲君 小說 奈落 全 郵金七十錢 稅八錢

佐野天聲君 小說 露の曲 全 郵金六十錢 稅八錢

同君 脚本 不死之誓 全 郵金六十錢 稅六錢

同君 脚本 大農外篇 全 郵金五十錢 稅八錢

梁江堂書類

梁江堂書類

藤田泣菫君 白羊宮 全 郵金壹圓 稅十錢

同君 白玉姫 全 郵金八十錢 稅八錢

同君 行く春 全 郵金四十錢 稅四十錢

河井酔茗君 塔影 全 郵金四十五錢 稅六錢

與謝野晶子女史 夢の華 全 郵金八十錢 稅四十錢

同女史 黑髮 全 郵金五十錢 稅六錢

同女史 戀衣 全 郵金四十錢 稅四十錢

梁江堂書類

横瀬夜雨君	二十八宿	全	郵税金五十六錢
ミヲー原著 野口米次郎君	剣と戀の日本	全	郵税金四十六錢
與謝野晶子女史	亂れ髪	全	郵税金三十四錢五十
同 女史	小扇	全	郵税金三十四錢五十
源田泣菫君	暮笛集	全	郵税金六十四錢
與謝野鐵幹君 與謝野晶子女史	毒草	全	郵税金五十六錢
文學士 高田梨雨君	科學小説 空中戰爭	全	郵税金四十六錢

細島梁川君	病窓雜筆	近刊	
同 君	我觀錄	近刊	
藤田日東君	官吏 會社員 商店員 立身策	全	郵税金五十六錢
小野寺中邨秋香君	新編手紙 男子用	全	郵税金四十五錢 木版半紙美裝
同 岡君	女子消息 文の手ほどき	全	郵税金四十五錢 木版半紙美裝
同 岡君	新編書簡文例 男子用	全	郵税金六十錢 木版半紙美裝
同 岡君	新編 女子書簡文例	全	金六十錢 木版半紙美裝

梁江堂・文榮閣

文學博士 井上哲次郎君 **釋迦牟尼傳** 金六十錢 郵稅八錢

文學博士 前田慧雲君 **大乘佛教史論** 金七十五錢 郵稅八錢

法老名彈正君 **耶蘇基督傳** 金六十錢 郵稅八錢

高橋五郎君 **釋迦論** 金八十錢 郵稅十錢

ゲーテ原著 高橋五郎君 **ファウスト** 金七十五錢 郵稅十錢

小室重弘君 **實驗雄辯學** 金三十五錢 郵稅六錢

山崎榮紅君 **法華經物語** 金五十錢 郵稅六錢

梁江堂・文榮閣

18

98
250

100979-000-5

98-250

決闘

チエホフ／著

M43

DBY-0247